

講座

日本の国際化

新しい世界秩序への模索

# 世紀間の 世界政治



鴨 武彦 編集

日本評論社



C00  
E302  
424

抄

講座

日本の国際化  
新しい世界秩序への模索

# 世紀間の 世界政治

6 鴨 武彦 編集



NB

日本評論社

1995, 2, 14.

---

●講座・世紀間の世界政治 第6巻

日本の国際化

——新しい世界秩序への模索

1994年9月10日 第1版第1刷発行

編者——鴨 武彦

発行者——大石 進

発行所——株式会社 日本評論社

東京都豊島区南大塚3-10-10 (〒170)

電話03-3987-8611

振替00100-3-16

印刷所——平文社

製本所——稲村製本

---

© T. Kamo

装幀／銀山宏子 Printed in Japan

ISBN4-535-06626-4

---

# 刊行にあたって

## 1 刊行にあたって

世界政治は、今、かつて経験してこなかったような歴史の大きくかつ重要な変革の時代にあるといつてよい。一九八〇年代の末以降、世界政治のダイナミズムは、「冷戦の構造」を終焉させ、実に複雑な形態をとりつつ、従来のパワー・ポリティクスの実態や内容を変質、変革させていく方向にあると思われる。その結果、世界政治のダイナミズムは、政府間、非政府間、国際組織、そして諸個人まで含めて多元的なレベルで重要な構造的変化の過程にあると特色づけることができる。

まさに、変革の時代にあつて、世界政治に新しい創造的な国際秩序や枠組みが大きく求められている。一九九〇年から九一年にかけての湾岸危機および湾岸戦争の不幸な事件があり、またボスニア・ヘルツェゴビナ紛争が依然として続くなど、世界政治は混乱を示しているが、世界政治は、それゆえにこそ、新たな秩序、より正当で確実な安全保障の秩序を必要としているといわなければならない。そこで、私たち研究に志し励む者が、こうした歴史の重大な変容について互いに鋭い感覚を持ち合い、

研究の関心を深め合いつつ、世界政治の変化の実際と今後の方向性、あり方を可能な限り精密かつ着実に解き明かす課題に取り組まなければならないと考える。

そのために、まず、主として戦後一九四〇年代後半以降、国際関係で示されてきた歴史の見方、理論のパラダイム（思考の枠組み）の妥当性や正当性を再考察する必要があるが出てきていると考える。と同時に、歴史の再考察は、従来の国際政治の理論研究や実証研究、また、地域研究の発展のあり方について、深く、再検討をせまるものと考ええる。そこで、冷戦の終焉という歴史の大きな変化に学問的関心を収斂させながら、世界政治のさまざまな地域の枠組み（国際体系の中心、周辺構造を含め）、さらにナショナルな視点に関係する政策や思想の問題領域（イッシュー）をとり上げて、世界政治の変動の特色を明らかにし、変革すべき国際秩序の展望の試みにも挑戦したい。

さらに、南北問題の視点の重要さと実際の研究の重要さを、本講座では一つの主要な柱とした上で、日本社会の国際関与のあり方についても踏み込んで議論したい。日本の学界や言論界に本講座の成果を問いたいと考える。

鴨 武彦

講座・世紀間の世界政治 第6巻

日本の国際化〔目次〕

——新しい世界秩序への模索

## 目次

## 第1章

## 地球の共(協)生学としての「国際協力」

..... 13

——グローバル・セキュリティの視点から

佐藤幸男

はじめに 14

## 1 問題の所在 17

(1) 冷戦後世界の紛争動態 17

(2) 兵器と経済のグローバル化 23

(3) 秩序と主体をめぐる「新構造主義」のアジェンダ 26

2 「国家安全保障」から「地球安全保障」へ 29

### 3

#### 冷戦後世界秩序の要件▼「国際協力」のありかたをめぐって

35

- (1) 安全保障論の陥穽 29
- (2) 環境と安全保障 32

### 4

#### 南北問題から地球的共(協)生へ

42

- (1) 「コモンズの悲劇」を超えて 43
- (2) 地球的共(協)生を阻む累積債務 44
- (3) 南北問題から地球的共(協)生へ 51

#### おわりに▼日本の「真の国際化」にむけて

55

## 第2章

# 日本の国際関与と新国際秩序

—— 地域の視点から ——

藪野祐三

|   |                  |     |
|---|------------------|-----|
| 1 | 状況に対する二、三の前提     | 70  |
| 2 | 地域社会の国際化         | 73  |
| 3 | 地域社会の多元性と国際化政策   | 82  |
| 4 | グローバル・システムの変容    | 91  |
| 5 | ローカル・イニシアティブの台頭  | 100 |
| 6 | 地域社会における国際関与の可能性 | 108 |
| 7 | 地域社会の国際関与▼残された課題 | 117 |

## 第3章

# 地球環境管理における地球益と人類益

岩間 徹

125

はじめに

126

1 地球環境問題とは何か

129

2 地球環境管理制度の確立

132

3 地球益と人類益の出現

133

(1) 国際社会全体の一般利益(地球益)

134

(2) 人類全体の利益(人類益)

136

(3) 人類益と世代間衡平

138

4 地球環境管理の合意形成における新たな動き

140

おわりに

157

6

日本の責任と役割

149

- (1) 地球環境における日本の位置づけ 149
- (2) 環境基本法における地球益と人類益 150
- (3) 理念法としての環境基本法 156

5

地球環境管理の合意の実施における新しい動き

144

- (1) 合意形成の方法・形式 141
- (2) 合意形成の促進策 142

## 第4章

# 政党政治の国際化と地球選挙権

岡沢憲芙

163

### 1

国境を超える政党

164

(1) 政党政治の時代

164

(2) 政党の機能と行動

165

(3) 政党の活動空間とその拡大

167

(4) 政党機能と国際化

168

(5) 国際化と政党資源

171

(6) 政党の国際化

178

### 2

地球市民権の時代へ

181

(1) 地球選挙権

181

## 第5章

# アジア・太平洋における日本の「国際化」

グレン・D・フック

211

序▼覇権とブロック

212

## 3

### 国際政党政治システム

199

- |            |                      |            |          |                            |                     |                        |
|------------|----------------------|------------|----------|----------------------------|---------------------|------------------------|
| (2)        | (1)                  | (6)        | (5)      | (4)                        | (3)                 | (2)                    |
| 欧州議会への選挙制度 | 欧州議会の政党政治▼政党政治の新しい枠組 | デンマーク・シヨック | 国政選挙権まで？ | 在住外国人はどう対応しているか▼理念は実現しているか | スウェーデンの在住外国人政策の基本理念 | スウェーデン的発想▼「開け開け、もっと開け」 |
| 201        | 199                  | 194        | 193      | 187                        | 185                 | 182                    |

| 4                                                      | 3                                                                                                       | 2                                                                               | 1                                                                         |
|--------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------|
| <p>(1) 地域におけるグループ形成 232</p> <p>冷戦後世界におけるグループ形成 232</p> | <p>地域的な結びつき▼援助・技術・投資・貿易 226</p> <p>(1) 援助 226</p> <p>(2) 技術 228</p> <p>(3) 投資 229</p> <p>(4) 貿易 230</p> | <p>冷戦後、アジア回帰はあるか？ 222</p> <p>(1) 軍事面でのアジア回帰？ 222</p> <p>(2) 経済面でのアジア回帰？ 225</p> | <p>冷戦時代における日本の地位 214</p> <p>(1) 冷戦秩序のなかの日本 214</p> <p>(2) 「異質な日本」 218</p> |

# 座談会

## 冷戦後の世界と日本

山内昌之・猪口邦子・藤原帰一・鴨 武彦

247

### 結論

239

(2) アジア主導によるグループ形成 235

I 冷戦後の世界 248

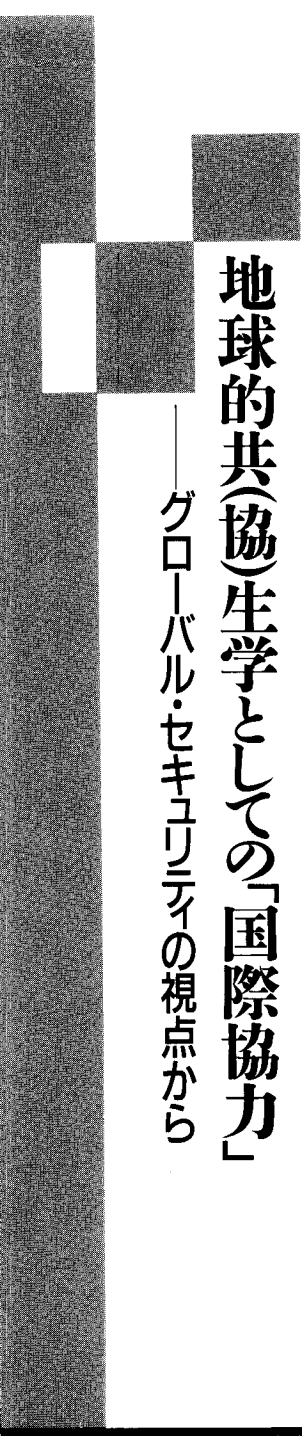
II 経済的リベラリズムの勝利か 263

III ネーション・ステートとナショナリズム 278

IV 日本の国際化 298

本巻の目的および趣旨 310

鴨 武彦



# 地球的共(協)生学としての「国際協力」

——グローバル・セキユリティの視点から

---

佐藤幸男

## はじめに

冷戦の終結は、国際関係、国際政治学の存立条件に大きな変化を与えている。それは冷戦の終わりがたんなる米・ソの和解にとどまらないからであるが、冷戦終結をもたらしたインパクトはよりもつと意味が深い。冷戦終結はつぎのような五つのトレンドの延長上にある。

第一は、核兵器を頂点とした世界軍事秩序による覇権維持の有効性が失われたことで、力による問題解決そのものが不可能となり、戦争の正当性が喪失したことである。第二は、主権国家システムの変容とその空洞化という現象はもはや避けられなくなっていること。この事実はまた、一九世紀からこんにちの二〇世紀末までの国際関係を規定してきた西欧近代の主権国家の解体を意味し、種種雑多な国家形態と国旗にあふれる世界を創出させている（げんに国連加盟国数は、一九九四年四月現在で一八四カ国である）。第三は、国境を越えた経済圏の確立、国家主権の部分的放棄、小地域の連合といったように多様なアイデンティティの再生という現象を生み出していること。とくに、国際関係は主権国家間の関係だけではなく、土着的な単位間の関係、国家間関係とは異なるチャネルをつうじた国境を越えた関係という、複合的多次元的な関係へと変容してきている。

第四は、これまで一国主義的な見地で立案されてきた安全保障、外交政策、開発といった諸施策が